

茨城大学学報

第315号

平成26年6月～平成26年7月



水戸ホーリーホックの選手・マスコットキャラクターが来校し、チラシ配りを行いました

(写真中央：左から船谷圭祐選手、中里崇宏選手、ホーリーくん)

INDEX

- ◆ 「こうがく祭+オープンキャンパス」を開催
- ◆ 教養科目の授業で「福祉体験」を実施
- ◆ 「ポスト震災社会のサステナビリティ学」出版記念講演会
- ◆ 理工学研究科が専攻の枠を越えて「中性子ビーム実習」を実施
- ◆ 平成25年度 戦略的地域連携プロジェクト成果報告会を開催
- ◆ 「商店街の空き店舗を活用した無料学習室の開放」
～工学部都市システム工学科3年次授業「設計演習Ⅰ」実践班の取り組み～
- ◆ 学生懇談会及び大学説明会を開催
- ◆ 茨城大学男女共同参画講演会を開催
- ◆ オープンキャンパスに7,191名が来学

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 「こがく祭+オープンキャンパス」を開催

工学部では、平成 26 年 6 月 1 日（日）に日立キャンパスにおいて「こがく祭+オープンキャンパス」を開催しました。このイベントは、周辺地域の方々や工学部への進学を考えている方々に茨城大学工学部の日頃の活動を紹介するためのもので、模擬店やサークル活動の発表を中心としたいわゆる学園祭としての「こがく祭」に加え、高校生、高専生、保護者の方々への説明会、そして最新の研究成果を紹介する研究室公開などオープンキャンパスとしての役割が一体となっています。

今年も、焼きそば、唐揚げといった定番から留学生の出身国の料理も味わえる模擬店、学生サークルによる音楽演奏、作品展示、演武の他、工学部ならではの「もの作り」に接することができる特別企画として、エコノパワー競技参加車両の試走、学生フォーミュラ参加車両の展示、ラジオ、七宝焼、アクセサリ、ペーパーナイフ、万華鏡、メダルの製作体験、化学実験の体験、たたら製鐵の実演、など多数の企画が実施され、小学生から大人まで楽しめる盛り沢山のイベントになりました。

現在のように 6 月に開催するようになってから 9 年目となり、この季節のイベントとしてだいぶ定着してきましたが、さらに多くの人に足を運んでもらえるように、昨年度からは日曜日開催へ変更し、常陸多賀駅、日立駅と日立キャンパスの間を巡回する無料シャトルバスも運行することにしました。今年は天候にも恵まれ、さらに地元ラジオ局の FM ひたちにサテライトスタジオからの生放送で大いに盛り上げていただいた甲斐もあり、大盛況のうちに終了となりました。



こがく祭の様子



エコカーの試走



メダル作り体験



留学生の模擬店

◆ 教養科目の授業で「福祉体験」を実施

教養科目「障がいのある人と共生・共存する社会（担当：有賀絵理非常勤講師）」の授業の一環として、国土交通省関東運輸局茨城運輸支局と協働による「バリアフリー教室」を平成26年6月11日（水）に開催しました。

当日は、一般社団法人茨城県バス協会、茨城交通株式会社、一般社団法人茨城県ハイヤー・タクシー協会、株式会社第一常陽タクシーにもご協力いただき、車椅子や高齢者疑似体験キットを身に付け、公共交通のリフト付きタクシーや低床バス（ノンステップバス・ワンステップバス）の乗降体験を水戸キャンパス講堂前にて実施しました。

特に学生たちが驚いたことは、バスの後方ドアからスロープが出てくること、そしてリフト付きタクシーにおいてはストレッチャーのまま乗降可能なことでした。実際に体験することによって、学生たちは公共交通関係者だけでなく、乗客であってもサポートする大切さがあることを理解しました。そしてサポートがあると、障がいのある人々が楽に、安全に、安心して乗降出来ることを学びました。

学生たちは、介助する側と介助される側の両方を体感することによって、社会の中では1人ひとりが協力し支え合って成り立っていることを肌で感じたようです。

今回の「バリアフリー教室」を通して、学生たちが自然に相手へのサポートが出来る“このころのバリアフリー人”になってくれることを期待しています。



ノンステップバスへの乗降体験の様子



リフト付きタクシーへの乗降体験の様子



高齢者疑似体験の様子
(手前：有賀非常勤講師)



「バリアフリー教室」に参加した学生ら

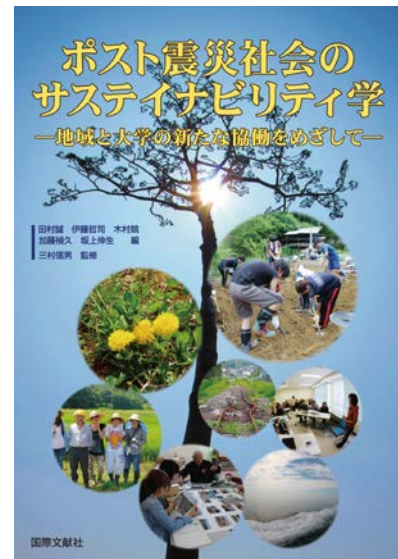
◆ 「ポスト震災社会のサステナビリティ学」出版記念講演会

茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS）は、「ポスト震災社会のサステナビリティ学」出版記念講演会を、平成 26 年 6 月 13 日（金）水戸キャンパス図書館ライブラリーホールで開催しました。本書は 2011 年の東日本大震災後の「ポスト震災社会」に対してサステナビリティ学からの課題提起とその実践を論じるために 32 名が執筆に参加し、3 月に国際文献社より刊行されました。講演会には一般、学生、関係者など約 70 名が参加し、書籍販売も行われました。

講演会では、まず ICAS 機関長である三村信男副学長から、現代社会の「サステナビリティ学のあり方」や「茨城大学の 21 世紀ビジョン」に関する基調講演が行われました。

続いての事例報告では、田村誠准教授から「サステナビリティ学の抱えるポスト震災社会への課題とその展望」について、坂上伸生助教から「地域サステナ・プログラム」での「次世代のサステナ人材の育成やその必要性」について、それぞれ報告がありました。また、木村競教授は、哲学の視点から「学際性、文理融合、新たな知の創造」は、大学と地域の「間」で生まれるのではないかと、という問題提起を行いました。

パネル討論は、茨城新聞社からお招きした細谷あけみ地域連携室長と社会連携センター副センター長の内田聡教授を加えて行われました。社会システムの変化の中で「人」の動きがどのように「サステナビリティ学」の掲げる目標や目的につながっていくのかを学問として明示し、理解していくことが必要であるといった意見や、子供のうちから「サステナビリティ学」に慣れ親しみ、広く知ってもらう機会を増やせば、それが大学から地域を盛り上げることにつながるのでは、といった意見が出るなど活発的な議論が繰り広げられました。その後も、参加者から「低炭素社会」に焦点を当てた質疑や「サステナビリティ」について意見交換がなされ、盛況のうちに講演会は幕を閉じました。



三村信男副学長による基調講演の様子



田村誠准教授による事例報告

◆ 理工学研究科が専攻の枠を越えて「中性子ビーム実習」を実施

茨城大学フロンティア応用原子科学研究センターでは、応用原子科学の研究教育を充実するために、パルス中性子ビーム実習を理工学研究科の大学院授業に初めて取り入れ、平成 26 年 6 月 17 日、J-PARC の中性子ビームライン iMATERIA を使用する「中性子ビーム実習」を理工学研究科博士前期課程の学生を対象に実施しました。

この実習は茨城県中性子 BL プロジェクトテーマとして採択を受け、理工学研究科内の応用粒子線科学専攻など複数の専攻科および原子力教育プログラムとして水戸キャンパス、日立キャンパスの学生が同時に履修する博士前期課程の履修科目の一つとして実施したものです。中性子ビーム利用は理学、工学の各専攻という狭い枠に当てはまらず、広い分野（物質開発、新解析技術、構造研究等）を俯瞰しています。

放射線作業従事者登録をした学生（14 名）が、フロンティア応用原子科学研究センター講義室で中性子の基礎講義を受け、加えて J-PARC 施設の安全教育を受けて施設ユーザーとして登録手続きをし、実験に参加しました。実験では、新たに開発したほう化物に発現する磁性を 4K~70K で、県 BL 研究開発部門教員の協力を得て、その場で中性子回折測定をしました。この実験により、学生は中性子のもつ基本的な 5 つの特性である①物を通り抜ける力、②磁石としての力、③原子の並び方を見る力を体験しました。（その他の特性には、同位体を見分ける力、原子の動きを見る力があります。）

金属製の管に封入した試料に中性子を当て、管を透過してきた中性子線の回折を、極低温まで下げた状態で見ること、磁性が物質中に現れる温度が判るとい、中性子でしか判らない事実を体験できたことは、科学を志す学生にとって、大変有意義な経験となりました。

冷凍機にバナジウム管に封入した試料（直径 6mm、長さ 10cm）をセットしている場面。この後、試料を 4K（マイナス 269℃、液体ヘリウム温度レベル）まで冷やし、中性子回折実験を行った。



◆ 平成25年度 戦略的地域連携プロジェクト成果報告会を開催

平成26年6月24日（火）、茨城大学図書館本館3階ライブラリーホールにおいて、平成25年度戦略的地域連携プロジェクト成果報告会を開催しました。

戦略的地域連携プロジェクトとは、自治体等のニーズを大学の教育研究課題として捉え、アカデミックな立場から課題の解決策を見出そうとするものです。各事業担当教員は、食育やまちづくり、防災、教育などの視点から、一年度を通して各自治体等と連携して課題解決に取り組みます。この事業を通して、茨城大学の教員等が自治体等との将来にわたる真のパートナーシップを確立し、大学全体の地域貢献を組織的・総合的に推進することを目的としています。

今回の成果報告会では、平成25年度に採択された12件のプロジェクトの内、8件のプロジェクトについて事業担当教員から成果報告があり、自治体関係者や学内の教職員は熱心に耳を傾けていました。成果報告後の質疑応答では、プロジェクトに関心を持った来場者から、事業を実施する上で困難だったことや、事業の今後の発展性などに関する質問があり、予定時間をオーバーするほど意見交換をする場面も見られました。



成果報告をする安江健教授（農学部）



成果報告をする山本勝博特任教授（教育学部）

◆ 「商店街の空き店舗を活用した無料学習室の開放」 ～工学部都市システム工学科3年次授業「設計演習Ⅰ」実践班の取り組み～

工学部都市システム工学科では、プロジェクト型学習として地域の抱える様々な課題に対して学生がチームとなって主体的に課題解決策を考える授業（現在の3年次前期の「都市システム工学設計演習Ⅰ」）を、20年近く前から導入し、続けています。

今回対象としている日立駅周辺商店街の活性化については、2014年度は有志学生による特別チーム（実践班）を編成し、学生が自由に企画・実践をしました。

実践班が、実践した内容は「商店街の空き店舗を活用した無料学習室の開放」です。学習室の名称は「At a Mall～あったまる」。学生たちは、地元商店会・市とも連携しながら、自分たちの力だけで、企画、運営、財源調達を行い、実践までこぎつけました。

今回の学習室の特徴は、商店街のお店を案内・宣伝できる案内板を設置し、協賛店の宣伝を可能にしたことです。近年の商店街のあり方としてコミュニティ機能に着目した企画でしたが、従来からの本来的な商業機能への波及効果もねらい、学習室への来客者が協賛店の案内ちらしと特別デリバリーサービスを使って、飲食物を購入できるようにしました。その結果、教室開放の直前までで16商店からの協賛を集めました。



商店街協賛店の案内・デリバリー受付コーナー

また、学習室の対象を地元高校生に設定し、そのための広報活動として、周辺高校への訪問、FacebookやTwitterといったSNSの活用を行いました。

広報の成果もあり、学習室を開放した平成26年7月1日（火）から7月7日（月）までにはトータルで53名の利用がありました。

今回の学習室は、日立市にあるケーブルテレビJWAY、FMひたち、NHK水戸、茨城新聞の取材を受けることにもなり、7月4日（金）にはJWAY、NHKで学習室の取り組みが放映されるなど、その反響も大きいものがありました。



勉強を教えている様子

来室した高校生へのアンケート調査の結果、ほとんどの人が企画内容に肯定的で、学習室は単なる学習スペースとしての機能だけでなく、現役大学生と直接話ができ、今後の進路を考えている高校生にとって、大学で学ぶ内容や授業、生活の様子などを聞けることも大きなメリットとなりました。

学習室の開放だけでなく、7月6日（土）の午前には「商店街と学ぶ～茨大生がつくるシェアスペース」と題してワークショップも開催しました。目的は、地元商店街、周辺住民、市役所、学生といった多様な関係者と、今回実践した学習室の内容や今後の展開可能性について議論を行うことです。こちらも積極的に広報を行い、結果 20 名の参加者を集めることができました。

ワークショップでは、最初に、昨年度取り組んだ学生（4年生）から過去の経緯や提案した活性化方策の概要を紹介し、次に今回の実践内容について実践班から紹介を行いました。その後、円卓を囲んで、実践班の 2 名がファシリテータとなって議論を展開しました。議論は盛り上がり、最終的には今回のアイデアの可能性と今後への期待を共有しつつ、本格的に継続運営するためには色々な課題があること分かり、それに対する新たなアイデアも多く出されました。「1 年を通した中高生の学習室へのニーズや提供すべきサービスの内容は何か」、「大学生が先生役で参画するインセンティブが欲しい」、「大学生と高校生の交流という面では他の大学学生にも来て欲しい」、「大学の夏休み時は日立へ帰省する大学生も参加可能」、「スペースの提供を含め地域、商店街、市、大学、学生が連携して事業化し、地元の活性化に繋げるべき」、といった意見が出ました。ワークショップの運営自体も実践班学生にとっては貴重な体験となりました。



学習室の実践終了後の記念撮影（実践班メンバー。学習室前にて。）

◆ 学生懇談会及び大学説明会を開催

茨城大学大学教育センターでは、平成 26 年 7 月 9 日（水）、学生懇談会及び大学説明会を開催し、学生 19 名（内、学部 1 年次 10 名、学部 2 年次以上 9 名）、教職員 7 名の計 26 名が参加しました。

「学生懇談会」は、学生からの率直な意見を基に学習環境の改善及び更なる充実を図るため平成 24 年度から開催している企画であり、大学教育センターでは、現在、平成 27 年度に向けて教養教育の改善に取り組んでいることから、今回は「初年次教育（教養教育）をより良くするためには」をテーマに学生から意見・要望等を聴取しました。参加学生からは、「授業中の教員の板書が小さくて読みにくい」、「自然系の授業において文系学生は相手にされていないと感じることがあった」、「同じ授業題目の授業でもクラス間で教育内容や授業の速度・成績評価基準に差がある」など種々の問題点が指摘されました。

「学生懇談会」後には、学生による大学施設の活用や大学の取組みに対する学生の理解促進のため「大学説明会」を開催し、「学生自習室（グループ学習）」「入試広報学生スタッフ」「インフォメーションラウンジ」「就職支援」について、それぞれの担当事務職員が、その利用法や取組みを学生に紹介しました。多くの参加学生から、「参考になった」など好評であったが、中には「もっと早く知りたかった」など大学のより積極的な情報提供を望む声もありました。

担当の小口祐一副センター長は、「まだまだ改善すべき点はたくさんある。学生の皆さんからの意見を踏まえて、できるところから教育改善を進めていきたい」と締め括りました。



学生懇談会では学生から積極的な発言があった



大学説明会で説明をする松岡英輝入学課係員

◆ 茨城大学男女共同参画講演会を開催

本学では平成 26 年 7 月 23 日（水）、水戸キャンパス講堂において、文部科学審議官の板東久美子氏を講師にお迎えし、「今後の人材育成と男女共同参画」と題した講演会を開催しました。

講演会には池田幸雄学長をはじめとした教職員や学生のほか、近隣の常磐大学や茨城キリスト教大学の学長等関係者約 200 名が参加しました。

板東文部科学審議官からは、データ等を踏まえながら、社会の変化と大学の役割について説明があり、社会の急激な変化に対応するためには、大学における多様な人材の育成及び女性の積極的な登用を可能にする環境づくりが重要であることが示されました。最後に茨城大学における男女共同参画推進のためには、管理職をはじめとする大学全体の意識改革が必要であり、今後の茨城大学の積極的な取組に期待しているとのエールがありました。

また、板東文部科学審議官は、今年 4 月にリニューアルオープンした茨城大学図書館本館を訪れ、リニューアルに伴い増設されたラーニング・コモンズや図書館が所蔵している貴重資料を見学しました。



講演する板東久美子文部科学審議官



講演会の様子

◆ オープンキャンパスに7,191名が来学

本学では、平成26年7月26日（土）に平成26年度オープンキャンパスを開催し、高校生や保護者など7,191名が参加しました。当日は天候にも恵まれ、青空の下、開場と同時に続々と入場してくる高校生や保護者などを、教職員と在学生在が笑顔で出迎えました。

各学部の学部説明会・模擬授業には多くの参加者が集まり、教員や在在学生による説明に熱心に耳を傾けていました。入試相談コーナー、過去問題閲覧・配布コーナー、保護者説明会、今年から開始した高等学校教諭懇談会など全ての企画が盛況であり、特に在在学生による相談コーナーや学生ガイドによるキャンパスツアーは、在在学生と高校生が積極的に交流し、有意義な企画となりました。

また、チアリーディング部や管弦楽団などによるサークルパフォーマンスがオープンキャンパスに華を添え、オープンキャンパスを終日盛り上げました。当日は、高校生の熱気が学内を満たした一日となりました。



看板の前に集まる高校生たち



理学部企画“施設探検”の様子